上代における連母音〔ai〕の転化について

森山隆

1

上代国語における一つの顕著な傾向として、母音の連続を避けるといふ現象は、数多くの事例と共に、これまでしば〳〵指摘され、そこにいかなる法則性が存在してゐたか、ほぼ明らかとなってゐる。(1)

私がここで取りあげる問題は、連母音〔ai〕の場合の連接忌避の現象について、その際生ずる母音の脱落、又は転化の方向を決定する要因を考へてみることであり、特に後者、転化即ち変母音形成の場合を取りあげてみたいと思ふ。

連母音〔ai〕は、おほむね次の三様の方向を取る傾向が見受けられる。

(1) ai＞i (例) アリソ (荒磯) 安里蘇　万・17・三九五九・他
ワギヘ (吾家) 和企弊　万・5・八四一・他
ワギモ (コ) (吾妹子) 和伎毛故　万・15・三六一六他

(2) ai＞a (例) ワガヘ (吾家) 和何弊　万・5・八三七 (及び5・八一六)
イモガヘ (妹家) 伊母我陛　万・5・八四四 (及び14・三四二一)
ナゲキ (嘆) 奈気吉　万・5・九〇四他

(3) ai＞ë (乙) (例) タケチ (高市) 多気知　記・一〇二

(註　以下、乙類音には平仮名を宛てて表記する)

第一の例は、他の多くの母音脱落の現象、ao＞o、au＞u、oa＞a、ou＞u、oi＞i、ea＞a、ei＞i、ua＞a、uo＞o、ia＞a、iu＞u等の脱落現象と同じく、複合語の前項の末尾の音節の母音が脱落する一般的現象の例であって、この現象の生ずる可能性を、岸田武夫氏は母音の響度 sonority にお求めになった(2)。

第二の例は、第一の事例に比べて、数的にも遙かに稀少であり語彙的にも限られてゐる現象であって、いはば第一の事例を支配した法則の例外と見做され、後項の語頭の母音が前項の末尾の音節の母音より狭い母音である場合は、後項の語頭の母音が脱落することがある、と説明されてゐる(3)。この事に関して私見もあるが、紙数の都合で他の機会に譲ることとする。

第三の例は、第一、第二の例の母音脱落現象と異なり、いはゆる変母音形成の現象であって、高市 takaiti→takëti 長息 (嘆) nagaiki→nagëki となったものと見做されてゐる。

ここで一往考へられてよいことは、何故に〔ai〕といふ同じ連母音

の形から、一方では母音脱落現象を起し、他方では変母音形成の方向へ転化するか、といふことである。即ち、母音脱落の一般的な傾向に従って、タカイチ∨タキチ、ナガイキ∨ナギキの変化を生じなかった理由は、右の第一の例が、上代において優勢且一般的な脱落現象であった以上、考慮されてよい。乙類ë列音の発生論的推定は、既に亀井孝氏にお説があるが(4)、右の第三の転化現象の根柢にはa↓ë(乙)交替の現象が、転化の方向を決定してゐるのではないか、と思はれる節がある。

上代における母音交替については、有坂秀世博士に「国語にあらはれる一種の母音交替について」の御論攷があり、タケ（嶽）ータカ（高）の関係は、露出形対被覆形として御説明になって居られる(5)。この露出形ë(乙)↓被覆形aの交替は、有坂博士のおあげになった交替現象の中でも、最も優勢且支配的に行はれた交替現象であって、この逆の方向、即ち、露出形a↓被覆形ë(乙)の交替は、一見行はれなかったかに見える。しかしながら、周知の如く、a↓ë(乙)の転化現象は橋本進吉博士によって指摘されたやうに、一聯の事例ハルカーハルけシの現象として存在してゐる(6)。

また、カげ↓カガミ（カげル）、カク（懸）↓カけル（翔）の如く、接尾辞「ル」が付いて必ずしもア列音化せず、け（乙）に付く事例もあることから、ë(乙)↓a交替のかげに隠れて、a↓ë(乙)転化も少数ながら存在したのではないかと推定される。

しかしながら、ハルカーハルけシの場合は、母音交替現象でなく、後続狭母音の影響によって生じたとされる村山七郎氏のお説がある(7)。私は母音脱落を起こす第一（第二）の事例が、それぞれ〔ai〕といふ連母音であって、しかもë(乙)の転化を起こさないのは、語としてのワガーワげ、イモガーイモげ、アラーアレといふ一定のaーë(乙)交替の形を持ってゐなかったためであらうと思ふ。ただ、アラ（荒）の場合は問題もあらうが、一往動詞の出自であるといふ点で、やはりタカータけ、ナガーナげの形容詞語幹の安定性には及ばなかったと考へられる。では第三の例〔ai〕∨ë(乙)の方向を決定するaーë(乙)の交替は果して可能であらうか。行論上、後続狭母音の影響によって起ったとされる村山氏のお説について考へてみたい。

註1、これまでの研究の要約としては大野晋氏「万葉時代の音韻」（万葉集大成第六巻言語篇三〇八頁）参照。

註2、岸田武夫氏「上代国語に於ける所謂「約音」について」（国語と国文学昭23・12所収）「……その現象の生ずる音節の前後何れかの隣接の音節が、その音節中の尾母音と同じ母音か或はそれより響度（sonority）の大きい母音と持つ音節である場合に、この現象の生ずる可能性が存する…」（四十五頁）

註3、橋本進吉博士著作集第四冊、二四五頁。岸田武夫氏「上古の国語における母音音節の脱落」（国語と国文学昭17・8）

註4、亀井孝氏 CHINESE BORROWINGS IN PRE-HISTORIC JAPANESE p 28〜29. note. 58)

註5、有坂秀世博士「国語にあらはれる一種の母音交替について」第二篇第三章。(1)。

註6、橋本進吉博士著作集第三冊一七七頁、一八五頁。

註7、村山七郎氏「古代日本語における母音の後進的影響」—ハルカ—ハルケ・シの関係の解明—（国語学第十七輯）

2

村山氏は橋本博士が指摘された古代日本語における「カ」に終る三乃至四音節副詞幹、例へばハルカ、アキラカに「シ」（形容詞終止形）、「キ」（形容詞連体形）が接尾したとき、「カ」が「ケ」（乙）に転化するといふ現象を取りあげ、これを古代日本語における母音の後進的影響としてその証明を試みられた。そして、この「カ」→「ケ」（乙）転化現象の理由として次の二点をおあげになり、説明を付された。

㈠ 語幹が三—四音節の長さを有すること（二音節幹では転化が生じない）。

㈡ 接尾辞が狭い母音をふくむこと（「シ」、「キ」、「ク」）。

語幹が三—四音節であるべきことに対して、氏は橋本博士の音節に関する考察を引用され、そして「二音節幹アカ、フカ、タカワカ、の語末母語aにくらべると、三—四音節幹末母音は弱まっており、それだけ後続接尾辞の母音の影響をうけ易くなっている。二音節幹末母音はかかる影響をはねかえす力をもつ。」と説明される。

第二の理由の説明として、その弱化した幹末母音に狭い母音iuが働きかけ、Ka＞Keの転化を生じたとされる。ただ、オホロカ・ニ、サヤカ・ニの場合転化を生じないのは「ニ」niのiが「キ」や「シ」のやうな強い影響力を持たなかったためと説明される。そして、後続音節母音が先行音節母音に影響を及ぼす他の例として、ワガ・オホキミ＞ワゴ・オホキミ、ヨヒ＞ヨヒ（宵）の溯行同化の現象をおあげになった。

ハルカ—ハルケ・シの転化が母音の後進的影響にあったとされる村山氏の見解が、かりに至当であるとしても、右の説明にはなほ不十分な点があると思はれる。

まづ、語幹音節の長さの問題であるが、アカ、フカ、タカ、ワカetcを二音節、ハルカ、シヅカ、カソカetcを三音節と音形式の上からのみ考察を加へることは、果して妥当であるだらうか。アカタカなどの「カ」が「ケ」（乙）に転化しないのは、単に、ハルカシヅカなどと比較した場合、二音節対三音節の長さのみの違ひであらうか。

その場合、例へばミジカシ（短）が「キ」を伴ったとき、ミジケ・キと「カ」→「ケ」（乙）の転化を行はず、また、動詞から転成したナツカシ（懐）などの語が、シク活用の場合「シ」「キ」の連続狭母音が接尾するにもかかはらず、ナツケ・シキと転成しない理由は、単に音節数のみの問題ではないことを暗示してゐる。

ミジカシ、ナツカシが語構成上ハルカ、シヅカと異なるやうにアカ、タカの「カ」とハルカ、シヅカの「カ」は語構成上、機能的にも異なる。アカ、タカはそれ〴〵語根と見做される音節であり、また有坂博士のいはゆる被覆形であり、従って接尾辞の付く形であるから「キ」、「シ」、「ク」の接辞による転化が行はれる筈もない。これに反し、ハルカ、シヅカの副詞的語幹と見做される語は、それ〴〵ハル、シヅといふ形で独立した用法を持ってゐる。（ハロ ハロ・ニ、シヅスげ等）

従って、アカ、タカに対応する副詞幹は、副詞幹から「カ」を除いた部分、

アカ　ハルカ
タカ　シヅカ
ナガ　サヤカ（サヤ　サヤ　等）
フカ　ユタカ（ユタニ等）

となり、副詞幹に付いた「カ」と、アカ、タカ等二音節幹の「カ」と語性上同一視できない。

このことがミジカ—ミジけ・シの転化が生じない一つの証左となる。即ち、ミジカ・ユフ（短木綿）ミジカ・ヨ（短夜）であってミジ・ユフ、ミジ・ヨではない。同じ三音節幹であっても、ハルカの「カ」とミジカの「カ」は語性上同一ではない。

また、村山氏は橋本博士の「……国語の音節は、発音に於てもその初頭に力を込め終に近づくに随って力を減ずるのが常であり之を聞くものにとっても、その最初が大切であって、そこで如何なる音であるかを識別するのであって母音の最後の部分は比較的重要でないのであるが、語全体として見れば、最後の音節の最後の部分は軽く発音される傾向があり、殊に二音節以上の語に於ては最後の母音は多少曖昧であっても、その意味を解するに支障を生じない事が多い」（著作集Ⅳ二四六頁）といふ博士の音節に対する見解を援用され、幹末母音弱化が前述の転化の一因であるとされるが、この場合どれ程の必然性があるかいささか問題であらう。

従って、ミジカシ、ナツカシ等の語に適用されないとすれば、この「カ」→「け」（乙）転化現象の一因をただ音節数に還元することは、十分な説明であるといへない。

第二に、接尾辞が狭い母音を持つとき、その狭母音が先行音節母音に、果してどの程度の影響を与へ得るかといふ問題である。それは「キ」「シ」「ク」等が接尾して生ずる「カ」→「け」（乙）の転化現象は、上代においては、当面のハルカ→ハルけ・シの一群の例しか見当らないこと、そして、その場合のカ—け（乙）転化現象を、母音の溯行同化の点からのみ説明することで十分であるか、といふ不安がある。

氏が溯行同化として認定されたワガ・オホキミ〉ワゴ・オホキミ、ヨ（甲）ヒ〉よ（乙）ヒ（宵）の現象は、母音相互の影響の点から見ると妥当であると思はれる。殊によ（乙）ヒの場合は、後続音に狭母音iが含まれて居り、iがo→ö転化現象を惹起するといふ事例として、氏の溯行同化説に良い例だと考へられる。

以下、狭母音を後続音節に持ち、転化形と非転化形とが存在する語をあげると、このやうな事例は十数例求めることができる。

（但し、東国方言、及び有坂博士の指摘された母音交替現象更に村山氏が溯行同化現象として説明されたa—ö交替現象の事例を除く）

A　1）ヨヒ yofi 古・3639〉よヒ yöfi 三・4399
　　アサヨヒ asa-yofi 古・4000,4006〉アサよヒ asa-yöfi 大・4106
　　三・4479,4480　　こよヒ kö-yöfi 大・4068
　　三・4489

　　2）イサヨヒ isayofi 三・372, 十2091
　　イサヨフ isayofu 三・428 七・1084,1071（元）〉イサよ。

フ isayöfu 三・264, 六・1008

3）ヨビ（呼）yobi 壬・3622,3627 右・3993,4018 ＞ よビ 元・4505 （yöbi 壬・3643）

のどよビ nödö-yöbi 五・892

4）ツクヨミ tukuyomi 壬・3245 ＞ツクよミ tukuyömi 壬・3599,3622

5）ヨリ（助詞）yori ＞よリ yöri＝99（一云）六・4044

ヨリハ（〃）yori-fa 壬・3655 六4085,4080 ＞よリハ yöri-fa 壬・3737,六・4069

6）トヒ（問）tofi 五・794, 右・3979 他 ＞ことヒ kötö-tofi 五・884 右・4406 六4125 他

ツマドヒ tuma-dofi 六・4127 ツマどヒ tuma-döfi 雄略記

7）トリハキ tori-faki 五・804 ＞とリハキ töri-faki 六・4094

8）ウツロヒ uturofi 右・3916 ＞ウツろヒ uturöfi 五・804 壬・3716, 元4106

ウツロフ uturofu 右・3982 ＞ウツろフ uturöfu 壬・3713 右・3978 六・4109 元・4160 元・4214, 4287 元・4484, 4501

9）カグロキ kaguroki 五・804 ＞カグろキ kaguröki 壬・3649

10）（べ）キ（助動詞）bëki ＞べキ beki 壬・3685

（べ）ク（〃）bëku ＞べク beku 六・4113

A' 11）イト（副詞）ito 八・1524 ～イと itö 四・786, 六4092, 元・4219

12）アめヒと amë-fitö ＞アめヒト amë-fito 六・4082

13）サヨヒメ sayofime ＞サヨヒめ sayofimë 五・871

14）アリソべ arisobe ＞アリそべ arisöbe 九・1689

15）アジロ aziro 七・1137 ＞アジろヒと azirö-fitö 七・1135

註1）Aはカナ書きの事例あるもの。A'以下は先行音節に狭母音を含むもの，及び訓仮名表記の事例。

2）平仮名は乙類音。ただしへ（乙）は（へ）をあてた。〔ï〕〔ë〕〔ö〕はそれぞれ乙類音をあらはす。

これらの例は，いづれも直前または直後に有る狭母音を含む音節の影響を，幾分なりとも受けて起った転化現象と見做すこともできるであらう。しかしまた同時に，次のやうな，ここふ狭母音音節を含まずに転化形を持つ事例も見出すことができる。

B 1）こ（来）kö 五・796,806 他 ＞コ（来）ko 六・3791

2）コラ（子）ko-ra 五・856, 六4125（2）, 4127 ＞こラ（子）kö-ra 五・899

3）こヱ（声）köwe 五・810,892 他 ＞コヱ kowe 壬・3622（類，古，西等 kö）

4）アソ（べ）（遊）己然 asobë 五・828,836, 壬・3618 ＞アそべ（命令）asöbe 六・4048

5）そ（へ）（副）söfë 八・1642 ＞ソ（へ）sofë 元4465

とリソ（へ）töri-sofë 右・4011

ヤリソ（へ）yari-sofë

19）トコシヘニ tökösifë-ni 九・1682・記 68 ＞トコシヘニ tökösife-ni 六・4106

註　以上の事例は訓仮名の例をも含む。最後の二例は狭母音「ニ」ni の接尾した事例である。

右の各事例における如く、狭母音 i を含む音節が接続する場合のみならず、広母音 a を含む音節が後続する場合においても、音韻の変動を認め得ることは、換言すれば、いかなる音節が接続するにしても、この変化（あるいは転化）は起り得る可能性を持ち狭母音 i のみが必ずしも常に溯行同化の役割を果してゐるわけのものでないことを示唆する。

恐らく、右の A 及び B に見られる甲←→乙両類の音韻変化は、奈良時代後期に進むにつれて顕著となった甲乙両類の混同現象であり、甲乙両類の区別の崩壊過程の反映と見ることが、より適切であると思はれる。

更に重要なことは、音韻の変化と音韻の交替との二つの関係である。その二つの視点の何れかをとるにしても、音韻相互の影響の場合においては、しばしばワガ・オホキミ～ワゴ・オホキミ、ヨ（甲）ヒ～ヨ（乙）ヒ（霄）の場合のやうに、影響形と非影響形が両存するのが通例であるに比べて、ハルカシ～ハルケ・シの両存は行はれず、常にハルケ・シと転化することは、単純な溯行同化現象と同一視できないものがある。

しかも、村山氏のおあげになった右の溯行同化の事例、ワガ・オホキミ＞ワゴ・オホキミ、ヨヒ＞ヨと現象は、A 及び B にあげた諸例中にも窺くるやうに、オ列乙類音を中心とした転化現象である。

六・4085

6）ソラ（空）sora 右・3969,4008 他＞そラ söra 六・4116

7）ナゾ（ヘ）連用 nazofë 六・4054 干・4307 ＞ナぞ（ヘ）nazöfë 干・4451（元，類，zo）

8）よそ（外）yösö 右・3978，六4169,4269 他＞よソ yöso 皿・383

9）アドカハナミ adokafanami セ・1238 九・1690～アどカハヤナぎ adö-kafa-yanagï セ・1293

10）アどモヒ（率）adömofi 二・199 九・1780 右3993～アドモヒ adomofi 九・1718

11）と（助詞）tö ＞ト to 二・227
とモ（〃）tömo ＞トモ tomo 土・2525
と（〃）tö ＞ト to 玄・3694，土2580

12）とけ（解）tökë ＞トけ tokë 右・3940

13）とホのミカド töfo-nö-mikado 玄・3668 六4011 ＞とホのミカど töfo-nö-mikadö 六・4113

14）ヤド yado 耳・826,842,851 他 ＞ヤど yadö 耳・818 玄・3580,3681

15）ヲとコ wotöko 干・4317 ＞ヲトコ wotoko 耳・804

16）ヨゾ（夜ぞ）yo-zö 玄・3662，六・4127 ＞よぞ yö-zö セ・1071（元，類，西等 yo）

17）シロタ（ヘ）の sirotafë-nö 耳・804 玄・3778 他 ＞シろタ（ヘ）の sirötafö-nö 玄・3751

18）ハロハロニ farofaro-ni 耳・866＞ハろハろニ faröfarö-ni 玄・3558 干・4398,4408

オ列乙類は、有坂博士、池上禎造氏、大野晋氏等の御研究によって明らかなやうに(1)、オ列乙類との結合力に富み、ウ列及びア列と結合し難く、ア列音と交替するといふ顕著な性質を持つ音韻である。そして、村山氏が「古代日本語のa—ö交替について」において指摘されたやうに(2)、a—ö交替現象が後続狭母音によって惹起された現象であるとしても、それはせいぜいa—ö交替現象の説明に過ぎず、a—ö交替現象に匹敵するa—ë交替の多くの事例を持つことなくして、ハルカ→ハルけ・シのa→ë転化における、後続狭母音iの溯行同化現象には直ちには適用され難い。

従って、ハルカ—ハルけ・シの関係を

(一) 語幹が三—四音節の長さを有すること（二音節幹では転化が生じない）

(二) 接尾辞が狭い母音を含むこと（「シ」、「キ」、「ク」の点から母音の後進的影響を実証するためには、更に精細な説明の付加がなければならない。

註1、有坂博士「古事記に於けるモの仮名の用法について」（国語と国文学昭7・11）

〃　「古代日本語に於ける音節結合の法則」（国語と国文学昭9・1）

池上禎造氏「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」（国語国文昭7・10）

大野晋氏「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見」（国語と国文学昭27・5）

註2、村山七郎氏「古代日本語の二、三の音韻現象について」その三（国語学第十七輯）

3

a→ë現象は、母音の後進的影響といふ点以外の問題として取扱ふことはできないだらうか。有坂博士の「国語にあらはれる一種の母音交替について」に示された諸種の母音交替の事例は、語幹音との関係から見ると、転化音とその直前の語幹音との結合様式は、次の九種の配列をとってゐる。

a—a形(37)例、a—u（u—a）形(22)例、a—i（i—a）形(9)例、

a—o（ö）〔o（ö）—a〕形(6)例、e—a形(2)例、u—u形(8)例、

u—o（o—u）形(4)例、ö—ö形(17)例、i—i形(1)例、

（註、語幹音—転化音、の結合様式を示す）

この結合様式を語幹音の側から見ると次のやうになる。

語幹音、転化音	語幹音、転化音	語幹音、転化音	語幹音、転化音
a—a 37例	i—a 6例	u—a 18例	e—a 2例
a—u 4	i—i 1	u—u 8	ö(o)—ö(o) 17例
a—ï(i) 3		u—o 3	ö(o)—u 1
a—o(ö) 2			ö(o)—a 4

即ち、語幹音の如何にかかはらずア列音化は著しいし、また、a—a、u—u、ö—öの各形の例数に見られるやうに、語幹音と同音を重ねる傾向が強い。しかしながら、語幹音は転化音に対し決定的な拘束力といふ程の傾向は見せてゐない。であるから、転化音は語幹音の完全な支配下にあるとはいへない。

三—四音節の副詞幹に付いてゐる「カ」は、共時論的に副詞性接尾辞と見られるので、先行音節との結合力は一語内の結合力程強くはないと見られ、従って先行音節の支配的な影響を受けない。

先述のやうに、副詞性語尾「カ」は、転化に際し後行音節の決定的な影響を受けたとも思はれず、今述べたやうに、先行音節の直接の支配下にあったとも思はれないから、このカ↓け（乙）転化は、いはば語幹化する際の一種の母音交替と思はれる。

問題は、カ↓け（乙）の音転化の方向である。有坂博士の事例によれば、動詞から形容詞に転成する際、形容詞語尾（キ、シ、ク）の接尾によって生ずる音変化は、ア列音8、オ列音6、ウ列音2、イ列音1の割合である。この中でオ列音をとるものは、すべて直前の語幹にオ列音が存在する。従って、形容詞語尾（ク、シ、キ）は語幹オ列音程の支配力を持ってゐないし、また、広母音「ア」への転化を阻止できる程の強力な働きかけも持たなかったと見ることができる。

そのやうな完全な支配力を持たない形容詞語尾（キ、シ、ク）の狭母音が、一方的にカ↓け（乙）の転化を、直接生ぜしめることができるとは考へられない。では、カ↓け（乙）転化は、副詞幹が形容詞の語幹化する際の古代国語の音韻変化として無理でない交替であらうか。

a—ë（乙）の音韻対立が見られるのは、有坂博士のおあげになった露出形ë対被覆形aの関係であるが、これは方向が逆である。この他には、四段・下二段両方に活用する一群の語の、四段未然形対下二段未然形がある。ハルカ—ハルけシの対立は、いはば副詞幹対形容詞であるから、語源的に同一であって、しかも活用語としては対立関係にある、四段対下二段の未然形の対応は、甚だ似通った対立と見てよいと思はれる。このやうな動詞の例は約四十例見出すことができる。（浮ぶ、浮く、懸く、潜く、摧く、離く、解く等）それらの対応形で、カナ書きの存する事例をあげると、次のやうな例が見出される。

• サク

a、一云見も左可受来ぬ（3・四五〇）

b、都をもここも同じと心には思ふものから語り左気見さくる人目（19・四一五四）

• とク（解）

a、衣の紐をあれ等可米やも（15・三五八五）

b、万世と心は刀気底わが背子がつみし手見つつ（17・三九四〇）

• ハク（矧）

a、陸奥の安太多良ま弓はじきおきてせらしめ来なば弦波可馬かも（14・三四三七）

b、梓弓つらを取波気引く人は（2・九九）

• ヤム（止）

a、絶えむ日にこそ我が恋ひ夜麻米（15・三六〇五）

b、雨立ち夜米牟（記・82）

・ワク（分）

a、うち靡く春の柳と我がやどの梅の花とをいかにか、和可武（5・八二六）

b、女郎花秋萩しのぎさを鹿の露和気鳴かむ高円の野ぞ（20・四二九七）

註1、aは四段活用の事例、bは下二段活用の事例、また、下二段活用に未然形のカナ書きの例の見えないものは連用形をあげた。

2、例文は万葉集大成本文篇に拠る。なほ、記番号は、武田祐吉博士校註岩波文庫本「記紀歌謡集」に拠る。

佐伯梅友博士は、後世下二段活用をする「隠る」「忘る」「触る」などの動詞が、上古に四段活用として用例のあるところなどから四段活用が古形ではないかと述べて居られるが(1)、同様に使役的な意味を持つ下二段活用の動詞は、四段活用型と派生関係にあると見ることができよう。さうすると、機能・意義に若干の差のある四段対下二段の派生関係は、未然形においてa—ë（乙）の対立を示し、恐らくa—ëの転化として把へることができると思はれる。

このa—ë（乙）対応は、必ずしも好個の傍証とはならないであらうが、ハルカ—ハルけシのa→ë（乙）転化に、何等かの示唆を与へてくれると思はれる。

註1、佐伯梅友博士「奈良時代の国語」一二八頁
「万葉集「泣く」「泣くる」考」国語国文昭7・10 二六九頁

前節において、私は古代日本語においては露出形ë（乙）→被覆形aの交替のかげに隠れて、a→ë（乙）の逆の方向にも交替の存することを主としてハルカ→ハルけシの事例をもって最も顕著に現れた現象と考へ、それが単に溯行同化の現象でないことを論じてみた。

最初に述べた連母音〔ai〕の転化現象の第三の事例、タけチ、ナげキにおいて、タカ、ナガの幹末母音aが第一、第二の事例の法則とは別に→ë（→öでもなく）の方向を取ることは、後続母音iとの結合によって惹起された単なる変母音形成の現象でなくて、恐らくタカ—タけ、ナガ—ナげのいはゆる露出形ë対被覆形aの関係及び当時行はれてゐたと思はれるa→ë転化の両交替現象から→タけ、→ナげの形を取り得たものと思はれる。そして、タカイチナガイキが、それ〴〵タキチ・タカチ、ナギキ・ナガキの形を取らずにタけチ、ナげキの形を持ったことは、a→←ë交替現象をその根柢に、形容詞幹がタカ—タけ、ナガ—ナげの安定した形を持ってゐたためと思はれる。